

不意のこと

申里恒子



不意のこと

中里恒子

中央公論社

不意のこと

定価一三五〇円

昭和五十七年八月二十日初版発行
昭和五十七年九月二十日再版発行

著 者 中里 恒子

発行者 高 梨 茂

印刷所 精 興 社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目八十七

振替 東京二二三四

©一九八二 検印廃止

不意のこと
目次

I

積年の賀 11

贈る 15

素顔 18

新鮮であること 22

手を取り足を取る 27

日記から 32

雑草まで 青い鳥 十三羽の雛

待つ 書齋と台所 買ふもの、買

はないもの とんでゐない女 地

廻り なんでもない人のやうに

ストライキ 生活の基本 萬年筆

とわたし

銀座鏡 44

生活の中に生きた瓶 48

封筒と便箋 52

室内の花たち 54

うな重 58

食べる・仕事・睡眠 62

さり気なく…… 66

II

鎌倉暦 75

初詣 匂ふ 切り通し道 墓と

海棠の花 木の下道 花菖蒲

特別警戒区域 夏越祭 秋の前ぶ

れ 田覚寺の石佛 百番観音 水

に散るもみぢ 和賀江島の雨

隠岐の島山 96

ハイカラさん 109

大和路・早春の椿の古寺 117

III

小袖誰が袖

131

結城三代

139

着物の歳月

142

IV

美に生きた義政

149

奈良のみ佛

162

光琳の字

166

大和 歩く道、見る道

168

V

ぼるとがるぶみの女性

181

心を打つた男たち

186

源氏物語について 192

三つの悲劇 197

俳句と小説の差 200

VI

堀辰雄さんの世界 213

生涯一片の山水 217

旅びと 生涯一片の山水

横顔 226

河上徹太郎さん逝く 229

奥野先生と句會で 234

吉屋信子さんを悼む 237

佐多さんとのつながり 239

短冊 243

石田波郷さんのこと 245

脇村義太郎氏夫妻のこと
248

251

248

VII

幽愁記
257

初出一覧

装幀
福井良之助

不意のこと

積年の賀

わたしは、このたび、古稀の祝を、文藝家協會から頂くことになった。このお知らせを手にした時、実は、おやつと思つた。七十歳——よくも生きたものである。

人間、生きてゐれば年をとるのは当然なことで、不思議でも、恥でもない。年の賀が、七十歳、七十七歳、八十八歳、九十歳とあるのは、それだけ生きた人間の長寿への賀であつて、別に、仕事の量とか、質とかに關係はない。

お仲間として、祝して頂けることを喜びたい。

わたしは、若い時から体力がなくて、常に、かばつて暮してきた。それがむしろ、五十前から、わたしの仕事への意欲は新鮮になり、仕事を続けるだけのエネルギーも、持続出来るやうになつたので、エネルギーがある限り、仕事はするであらうこれからも。

従つて七十といふ年に驚くよりも、ほそぼそと約五十年、かういふ仕事を続けた自分の生き方を、改めて見なほしたい。

伊達や酔狂で、メンタルな仕事一本で通したわけではなく、ほかに、わたしにはなんにも出来

る仕事がなかつた。今や、文学は商売であると、言ふ出版社もある。もちろん、わたしも慈善事業などと思はない。ただ、商売だけではないものが、わたしたちの仕事には要求され、それがまた、仕事への意慾、エネルギー源にもなつた。これは商売よりも大事なことであらう。

年を重ねることで、一つの集積が仕事の上にも出てくるやうになることを、わたしは望んでゐるが、思ふことの十分の一も、具体化されないかもしれない。それはわたしの年のせるではないのである。

才能、社會的現象、時代、流行、要素はいろいろある。本質的に、不変でも、商売上あはない場合もある、若くても。

戸籍上の年ではないものを、わたしたちは別にもつてゐて、その仕事年齢が活発であるならば……経験だけが凡てではない仕事の上では、積み重ねが、どこまでもを言ふかといふことである。

積み重ねだけではない、新鮮な眼と、力を持続しなければならない。これを、四十年、五十年つづけても、かうなるといふあてはない。飽きたと言つてやめたら、それまでである。どうなるかわからないけれど、人間は生きてゐるやうに、仕事も、生きなければならないのである。

随筆を三枚、五枚と書かされる。終りに、作家何歳、と必ず書いてあつた。

わたしは、年と仕事と無関係とは思はないが、なにも、一つ一つ書いたもののあとに、年まで明記する習慣は、若い時から好きではなかつた。総合的に作家の仕事を見る時、何歳の時、何を書いたかといふことは問はれるであらう。

年齢といふものは、一應その人間の標準として、何年この仕事に従事したとか、何年研究したとか、一種の功績としてみとめられる場合もあるが、なんにもしなくても、平凡に、七十年生きた、それだけでもいいのである。ただ、わたしたちのやうに、仕事をしてゐる者にとつては、七十年には七十年の節、八十年には八十年の節が、いやでも、現れるであらう。

わたしは、實際の年よりも、さういふ節めを、幾つか越えてきた、これからも越えてゆくであらう、それに、殆ど、無意識であつたことを、まことに、うかつであつたと思ふ。

七十は、もはや古来稀なる年齢ではないが、肉体といふものは怖いもので、年なんか関係ないと思つても、身辺の知りびとたちが、或る時から、突然、七十五歳となり、八十歳となつた年が、肉体に現れる。

たぶん、わたしも現れてゐるであらう。

年を自覚して、年を忘れてゐるわたしだが、轉ばぬ先の杖、そろそろステッキでも注文しよう。昔、ステッキは、二十歳代でも伊達に持つた。ステッキを持つたからと言つて、老人と、考へ違ひしてはいけません。自然に、自由に、蓄年の美学を発揮するチャンスである。

生きものの凡て、老年を全うすることによつて、その生き方が問題にならうか。では、どう生きればいいのか、それは、わたしにも、いまだにわからない。

わたしは、若い者を羨ましいとは思はない。もう一度お前を若くしてやると、神さまの仰せでも、御免かうむる。折角七十まで生きた。これまでの年月は、仇やおろそかではなかつた。今年の十二月二十三日で、わたしは、正確に七十歳となる。まだ未来があると思つて、うすばんやり

の
ま
ま
で
ゆ
か
う。
。

五
十
四
年
五
月
吉
日